

一 次の記事は、浅田次郎『霞町物語』の一節で、まもなく都電が廃止になるころの東京が描かれており、「僕」の「祖父」はクリスマスに走る花電車を撮ろうとします。なお、「僕」の「父」は、明治生まれの写真師である「祖父」（＝初代「伊能夢影」）の弟子であり、婿養子です。読んで、あとの問いに答えなさい。

僕はひとけのない^{*1}墓地下のカーブで、^{こがらし}風^{かぜ}に慄えながら花電車を待った。

そこはまったく写真撮影に適さない場所だった。第一に、街灯のほかの灯りが^{あかり}ない。後ろは青山墓地、向かい^{むかい}は米軍キャンプである。しかも四方を繁みに^{かこ}囲まれて^{かこ}いるそのあたりは、霞町の名の^なユライのごとく、夜更けとともに霧が^{くも}湧く。何よりも、停留場も^{こうさてん}交叉点もないカーブを、都電は全速力で駆け抜けるのである。

「青山一丁目の方が、よかないですか」

と、父は機材を出したためらいながら言った。

「よかねえよ。俺アこしかなえって、せんから決めてるんだ」

^{*2} 風にかき乱された霧が、街灯の輪の中で渦を巻いていた。父が仕方なしに機材を^{ひろ}広げる間、祖父はステッキに両手を置いて

「やっぱ、わりですよおやじさん——」

「けつこうじゃあねえかい。ほれ、おめえの尊敬する何とかいうベトナムのカメラマンは、鉄砲の弾^{たま}の中でシャッターを切ったんだらう。あれアいい写真だ。おそらく奴ア、弾が飛んでくるたんびに、しめたと思ったにちげえねえ。プロってえの、ア、そうじゃなきゃならねえ」

「そりやま、そうですけど……」

心のやさしい父は、ここまで準備を整えた祖父の^い一世一代とも言える写真が、^ウムザンな結果に終わることを^{おそ}惧れたにちがいなかった。

それからしばらくの間、父は心の底から祖父を^い諫め続けた。祖父は頑として譲らなかった。真摯な師弟のやりとり^{しんし}に、僕や母の口を（^い）余地はなかった。

結局、父は^エゴウジョウな師匠に屈した。

「せめて、こつちを使つちやくれませんか」

父はフラッシュをセットした^{*3}。ペンタックスをさし出した。

「いや、俺のを使う。ただし、おめえもそつちで、同時に^{*4} ストロボを^た焚け。合図は昔と同じだ」

わずかの間に、雪はほぐれ落ちる^オマワタほどの大粒になっていた。祖父は^{*5}掌でライカのレンズをかばいながら、父の立つべき位置を指図した。

深いしじまの中で、都電の^カ警笛が鳴った。隣りの新龍土町の停留場を発車したにちがいない。道路の向こう岸には、いつの間にか大勢の^{*6} G I が見物にやつてきていた。

「おじいちゃん、写せるかなあ。ストロボ替えてる暇なんかないよ。ここ、すごいスピードで来るんだ」

母は答えずに、じつと夫と父の仕事を見つめていた。

ストロボは一回で焼き切れてしまう。玉を替える間などあるわけではないから、写真は一発勝負だった。

祖父は^{*7}ハンチングの底を後ろに回し、街路樹の幹に肩を^キアズけた。両肘をぐいと締め、何度も^{*8} ファインダーを^{のぞ}覗きながら足場を定める。ふだんの老^{ろう}耄した姿など嘘のように、腰も背もしゃんと伸びていた。

一方の父も真剣だった。指示通りに少し離れた場所^で三脚を開き、毛糸の帽子を脱いでカメラをかばっている。

緊密な時間が刻まれた。雪を吸って真黒に濡れた道路に、水銀を流したような二本の線路がはるかな弧を描いていた。

母が背中から僕を抱きすくめた。^① 僕の鼓動と同じくらい、母の^{*9} 細い胸は高鳴っていた。

向こう岸の G I たちから、いつせいに喝采と指笛が起こった。

全速力でカーブに現われた花電車は、クリーム色のボディが見えないほどの造花で飾られ、フレームには目くらむほどの豆電球を明滅させていた。ヘッドライトの帯の中に霧が渦を巻き、轍からは雪が吹き上がった。

「まだっ！ まだまだっ！」

祖父が怒鳴った。

「いいかつ！」

「はいいつ！」

ひと呼吸おいて、祖父は^{*10} 木遣りでも唄うような甲高い合図の声を張り上げた。

「ああつち！ ねええつ！ さん！」

一瞬、夜の底に焼きつけられた都電の姿を、僕は一生忘れない。

二台のストロボと同時に、都電のパンタグラフから稲妻のような青い火花が爆ぜた。真昼のような一瞬の閃光の中で、電車はそのまま止まってしまったように見えた。

しかし、都電は警笛を鳴らし続けながら、全速力で僕らの前を通過していたのだった。豆電球に飾られた運転台に、^{*11} 順ちゃんが無愛想な顔でつつ立っていた。

母が、ほうつと息を抜いた。

「あつち、ねえ、さん、だつて。久しぶりで聞いたわ」

「あっちねえさん。おかしいね」

僕と母は心の折れたように屈みこんで、大笑いに笑った。

都電が行ってしまつてからも、祖父と父はフラインダーから目を離さずに立っていた。

少し間を置いて、向こう岸からGIたちの喝采が上がつた。それはカメラマンたちに向けられた賞讃に違ひなかった。祖父はようやく身を起こし、ハンチングを襟に胸前に当てて、「サンキュー・ベリマツチ！」と答えた。

「撮れたの、おじいちゃん」

僕は祖父に駆け寄つた。

「焼いてみりやわかる。まちがつたつて暗室のドア開けたりすんじゃねえぞ」

祖父は誇らしく胸を反り返らせ、無愛想に、まるで花道をたどる役者のような足どりで雪の帳の中に歩みこんで行つた。
② 気が済んだかな

三脚を畳みながら、父が悲しげに言った。

祖父は誇らしく胸を反り返らせ、無愛想に、まるで花道をたどる役者のような足どりで雪の帳の中に歩みこんで行つた。

その夜、僕と父は夕飯もそつちのけで暗室にこもつた。

赤ランプの下の父の顔はいつになく緊張していた。

「A」

父は少し迷つてから言った。

「B」

「C」

「D」

「E」

「ペンタックスが写つていて、ライカが真黒だったら、おじいちゃんガツカリするだろう。おとうさんの方は失敗してたことにしとけ」

「D」

「E」

話しながら、僕と父はあつと声を上げた。現像液の中に、すばらしい花電車の姿が浮かび上がったのだった。

「すごい、絵葉書みたい」

父は濡れた写真を目の前にかざすと、唇を憐れせ、胸の（2）ほどの溜息をついた。

「信じられねえ……すげえや、こりゃあ」

暗室から転げ出て居間に行くと、祖父と母は勝手にケーキを食っていた。

父と僕のあわてふためくさまをちらりと見て、祖父はひとこと、「メリー・クリスマス」と言った。家族が大騒ぎをしている最中にも、まるで当然の結果だと言わんばかりに、焼き上がった写真を見ようとしなかった。

「まあ座れ。戦に勝つたわけでもあるめえに、万歳はねえだろう」

僕らは尊敬する写真師、伊能夢影を中にして、炬燵にかしこまった。

まったく芝居のように長い間をとって紅茶をすすり、両切のキャメルをつけてから、祖父は言った。

「ベトナムのカメラマンはうめえよ。俺よりやちよいと下がるが、おめえよりかはうめえ」

「当然です、おやじさん」

と、父は誇らしげに答えた。

「なら、なぜおめえがへたくそか、わかるかえ」

「機材に頼るから、でしょうか」

「いや、そうじゃあねえ。少なくともおめえのペンタックスは、俺のライカよりか優秀なカメラだ。あの露出を計る機械にした

つて、あるのとなえのとじゃあ、大違いだろう——要は、ここだ」

と、祖父は丹前の胸に掌を当てた。

「きれいな景色を撮るのもけっこうだが、景色にや感情てえものがねえ。おめえの撮る写真は、道具さえ揃や誰だって撮れる。つまり、おめえはやさしさが足んねえ」

はあ、と父は押し黙った。

父の作品がグランプリに輝いたのは、ずっと後のことだ。

風景写真をやめたあと、父は消え行く東京の風物を抒情的なモノクロフィルムに収めて、何度か佳作に選ばれた。だが、グラン

プリを受賞した一枚は、絵画館前のいちよう並木で銀杏を拾う、老いた祖父の姿を写したものだつた。

父と祖父が改まって撮影に出かけたという記憶はないから、病院に診察に行った帰りがけか何かに、偶然撮影した一枚だつたの

だろう。

落葉の散り敷く舗道に、祖父がステッキを投げ出して、はいつくばるような感じで銀杏を拾っている。その腰には古いライカが

回されている。タイトルは「老師」だつた。

祖父が喜んだのは、受賞そのものよりも作品の出来映えよりも、父が「伊能夢影」という名で世に出たことだつた。

そのころ相当に呆けてしまつていた祖父は、正月の新聞にでかかど掲載された作品を見て、はじめはさんざんにこきおろして

いたのに、父が「伊能夢影」の活字を示したとたん、「でかしたでかした」、と喜んだものだつた。

父の作品がグランプリに輝いたのは、ずっと後のことだ。

風景写真をやめたあと、父は消え行く東京の風物を抒情的なモノクロフィルムに収めて、何度か佳作に選ばれた。だが、グラン

プリを受賞した一枚は、絵画館前のいちよう並木で銀杏を拾う、老いた祖父の姿を写したものだつた。

父と祖父が改まって撮影に出かけたという記憶はないから、病院に診察に行った帰りがけか何かに、偶然撮影した一枚だつたの

だろう。

僕が高校を卒業する年の冬、祖父はスタジオの籐椅子^{とういす}の上で、^{*13}ゴブラン織りの絵柄のようになって死んでいた。駆けつけた父は、祖父の膝^{ひざ}からライカを取り上げると、胸に抱きしめて、わあわあ泣いた。検屍^{けんし}の医者や警察官が来ても、近所の人がおくやみに来ても、そのままどうかなっちゃうんじゃないかとまわりが気を(3)ほど、スタジオに立ちつくして泣き続けていた。

祖父の骨は祖母や伯父の待つ飯倉の小さな寺に葬られた。

納骨の一部始終を撮りおえたあと、母は手早く新しいフィルムに入れ替えて、ライカを骨箱のかたわらに収めた。

③「行^いつてらっしゃい、おじいちゃん——」
ライカの焦点は^{無限大}∞の印に合わされていた。

【語注】*1 墓地下……地名。 *2 キヤメルの両切……「キヤメル」はたばこの銘柄。「両切」は両端を切断したたばこ。

*3 ペンタックス……当時としては新型のカメラ。 *4 ストロボ……写真撮影用の閃光装置。

*5 ライカ……旧型のカメラ。 *6 GI……進駐軍であるアメリカ兵。 *7 ハンチング……鳥打ち帽。

*8 ファインダー……焦点や構図を見定めるカメラの装置やのぞきレンズ。 *9 紬……絹布の着物の一種。

*10 木遣り……大木などを大勢でかけ声をかけながら運ぶときにうたう歌。

*11 順ちゃん……「祖父」の知り合いの都電運転手。 *12 ツイード……羊毛の毛織物。

*13 ゴブラン織り……多くの毛糸を用いて風景や人物を織り出した織物。

問一 —— アゝキの、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 (1) (2) (3) にあてはまる言葉を、次のアゝオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

口を(1)	ア 切る	イ そろえる	ウ つぐむ	エ 挟 ^{はさ} む	オ 割る
胸の(2)	ア おどる	イ さける	ウ 騒 ^{さわ} ぐ	エ つぶれる	オ ふさがる
気を(3)	ア 落とす	イ のまれる	ウ 張る	エ 回す	オ 揉 ^も む

問三 —— ①「僕の鼓動と同じくらい、母の紬の胸は高鳴っていた」とありますが、この時の「僕」と「母」の気持ちを説明しなさい。

問四 —— ②「気が済んだかな」とありますが、「父」はこの時、どういう気持ちでいますか。最もふさわしいものを、次のアゝオから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「祖父」が自分を気にせず歩道をさつさと歩き出したので、自分が無視されたように思われて悲しくなった。
イ 都電の廃止前にうまく写真を撮ることができて、「祖父」の最後のわがままをかなえることができてほっとした。
ウ 「祖父」が頑固^{がんこ}に最後まで自分の考えを無理に押し通したことに對して、かえってさっぱりした気分になった。
エ 花電車の写真をひさしぶりに撮ることで、死が近づいている「祖父」を満足させてやることで安心して。
オ 花電車の写真は失敗したにちがいないと確信し、「祖父」がすっかり老いてしまったことにさびしさを感じた。

問五 「A」から「E」にあてはまる会話を、次のアゝオから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア え、どうして?
イ おとうさん、やさしいね
ウ おとうさんのフィルムは?
エ ペンタックスのフィルムは抜いておいた
オ おじいちゃんは、もっとやさしいよ。較^{くら}べものにならないくらい

問六 —— ③「ライカの焦点は^{無限大}∞の印に合わされていた」とありますが、これについてコウタロウ君とショウヘイ君が話し合いました。二人の会話の共通点から、『^{無限大}∞の印』がどのようなことを表しているかを十五字以内で答えなさい。ただし、「無限大」または「無限」という言葉は使わないこと。

コウタロウ 「『行^いつてらっしゃい』って別れを告げているけれど、それで終わりということではないようだね。」
ショウヘイ 「そうそう。だから、最後の『^{無限大}∞の印』って、それで終わりではなく、『おじいちゃん』のことをいつまでも忘れないという点で、永遠とか無限を表しているんじゃないかなあ。」
コウタロウ 「それから、『新しいフィルムに入れ替えて、ライカを骨箱のかたわらに収めた。』ってあるよね。ここには、『おじいちゃん』に對して、いつまでも好きな写真を撮り続けてください、いつまでも僕たちを遠くから見えてください、っていうようなメッセージがこめられていると僕は思うんだけど、どうかなあ。」
ショウヘイ 「そうだね。みんな、『おじいちゃん』のことが好きで、尊敬しているんだろね。だから、限りない感謝の気持ちもこめられているのかもしれないなあ。」

問七 「祖父」がプロの写真師としての自信を持っていることを、比喩^{ひゆ}を用いて表している五十字以上六十字以内の一文を本文よりさがし、最初の五字を答えなさい。

問八 本文中の「都電(花電車)」「古いライカ」「祖父」の物・人などには、どのような考えがこめられていますか。本文全体の内容に即してまとめた次の文章の続きを答えなさい。ただし、「それら」からはじめること。

都電も町全体もカメラも、「祖父」という人間も、古くなつて衰え消えゆくものではあるが、

それら

という考え。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

短歌を詠むはじめの第一歩は、心の「揺れ」だと思ふ。どんなに小さなことでもいい、なにかしら「あつ」と感じる気持ち。その「あつ」が()になつて歌は生まれてくる。

「あつ」がなかったら、どんなにがんばつて言葉を並べても、歌にはならないだろう。逆に「あつ」がありさえすれば、上手下手はあつても、必ず歌になると思ふ。

「あつ」なんて表現ではすまないような ^ア波瀾万丈の人生や、大きな感動。もちろんそれらからも、たくさん短歌は生まれてくる。大きな感動から小さな感動まで、伸縮自在に対応できるというのが、短歌のいいところ。たとえば大河ドラマにはならなくても、短歌にはなる、という ^①無数の「あつ」が私たちの日常にはあるはずだ。

歌の生まれてくる契機について、紀貫之は ^キ「古今集」の「仮名序」で次のように述べている。

やまとうたは、ひとのこころをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。

和歌というものは「ひとのこころ」を種として、いろいろな「ことの葉」つまり言葉となつたものである——というわけだ。

文法的には、もう一つ解釈があつて「よろづの」の「の」を主格を表すと考えると「いろいろなことが言葉となつたもの」というふうになる。もちろん、どちらでも主旨はそう変わらない。いずれにせよ、今読んでもちつとも古くさくない、^イ素敵な一文だ。貫之はまた、

花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。

とも言う。花に鳴くうぐいすや蛙の声は一つの例であつて、大切なのは ^②「いきとしいけるもので歌を詠まないものがあるうか」ということだろう。何か特殊な才能や感受性を持った人の心だけに、歌は生まれるのではない。生きていけば、心があれば、誰にだつて歌の種は宿るのだ、という考え方である。私も大賛成だ。

しかし、せっかく宿つた種も、そのままにしておいては干からびてしまう。短歌を詠むとは、感動の種を言葉に育て上げることなのだ、と言えるだろう。

自分の心が「あつ」と揺れたら、ただ揺れっぱなしにしておかないで、もう一度丁寧に見つめなおす。短歌を作りはじめて私は、たとえ平凡な「あつ」であつても、自分にとつてはかけがえのないものだ、と感じるようになった。と同時に、短歌を作ることによつて、^ウ小さな小さな揺れにも敏感になつた。短歌を作ることは、心を柔らかにすることでもあるのだ、と思ふ。

A トーストの焼き上がりよく我が部屋の空気 ^キ2 ようよう夏になりゆく

たとえば右の一首は、朝食のためにパンを焼いていて「あつ」と思つた。それまでは平均して五分かかつていたトーストが、今朝は四分半でいい。しかもぱりつと焼けている。こんなところにも夏は来ているんだなあ、という心の揺れ。

実はこの歌には、遠いところで下敷きになっている記憶がある。子どものころ、母は毎朝、家族それぞれの好みにあわせて、卵を茹でわけてくれた。半熟、三分熟、固茹で、^キ3 エトセトラ。「すごいなあ、卵の中が見えているみたい」と私は感心したものである。

ある日のこと、すごい寒波がやってきて、寒い寒い朝を迎えた。 ^③「お水もずいぶん冷たいわねえ。いつもより長めに茹でなくっちゃ」と母。半熟なら何分、という単純なことではなく、^③水の温度によつても、茹で時間は変わってくるのだ。

卵の茹で時間にも反映する季節の移りかわり。へえつな一なるほど、と思つた。そのときは、思つただけだったが、「へえつ」が心の底のほうに沈殿していたのだろう。トーストの焼けぐあいが違うことに気づいたとき、ぱつと「卵の茹で時間」の記憶が浮かんできた。

こんなふうには、いくつかに似た経験が重なつて「揺れ」の輪郭がはつきりしてくることも多い。「あつ」と声は出さないまでも、口を少し開くくらいに「揺れ」。それでもいつかは言葉という形になるときが、きつとくる。私は、そんなふうなまだ形になっていない ^エ「あつ」のかけらたちを、感動の貯金と呼んでいる。すぐには使えなくても、しつかり貯めておくことが大切だ。

私自身のことを振り返ってみると、とても大きな貯金箱となつたものがある。

学生時代、家族にあてて、三日に二枚というくらい、せっせせっせと葉書を書いた。東京に出てきて、初めての一人暮らし。寂しくてしかたなかった。家族とのなんてことない日常会話が、突然なくなつてしまったことが、一番こたえる。朝起きて「おはよう」と言う人がいない。「今日こんなことがあつてねー」と無駄話をする人がいない。 ^④そういうものの良さというのは、なくなつてみてはじめてわかる。

葉書は、いつてみれば日常会話の代わりとして書きつづけられたのだと思う。内容はまことにとるにたりないものばかり。肉の安いスーパーを見つけたとか、お風呂やさんは何時ごろ混んでくるとか、東京の人は雨が降ってもあんまり傘をささないみたいだとか、トマトがおいしくなってきたとか、サークルの友だちとアルバイトを始めたとか……。

けれどそんな日常雑記のなかに、何年か後、かたちを変えて歌になったような感覚が、ひよこつと混ざっていたりするのだ。「だんだん暑くなってきました。朝起きるともう汗をかいていたりします。でも、暑いねーと話しかける人もいないので、ただ黙って朝ごはん。これがやっぱり寂しいなあ。暑いねーと言ったからといって涼しくなるわけではないんですが……」

B 「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたかさ

この歌は、実はずっと後で、恋の場面で生まれたもの。が、遠く学生時代の葉書にも、すでに歌の種はあったことがわかる。答える人のいない寂しさを味わったことのある心だからこそ、答える人のいるあたかさに、揺れることができたのだ、と思う。

「今日、シャガール展に行ってきたのですが、ガラス張りになっていると絵って見にくいですね。場所によつては光が反射して、自分の顔ばかり映ってイヤになってしまいます……」

C ゴッホ展ガラスに映る私の顔ばかり気にして進める順路

この歌もまた、後に生まれた恋の歌。デートのときというのは、今の自分の表情がとても気になる。以前は邪魔だと思ったガラスが、今度は鏡がわりになってしまった。

やはりこの場合も、ガラスに映る自分の顔を気にしたかつての経験が、別のかたちで「揺れ」を呼んだのだ、と思う。

(俵万智『短歌をよむ』より)

【語注】*1『古今集』の「仮名序」……古今和歌集の巻頭に添えられた文章。古今和歌集の編集に関わっていた紀貫之が書いた。

*2 ようよう……だんだん。

*3 エトセトラ……くなど。

問一 ()にあてはまる漢字一字を本文からぬき出して答えなさい。

問二 ①「無数の『あつ』」とありますが、~~~~アオのうち、「無数の『あつ』」といえるものを二つ選び、記号で答えなさい。

問三 ②「いきとしいけるもので歌を詠まないものがあるか」とありますが、この後に補う表現として、最もふさわしいものを次のアオから一つ選び、記号で答えなさい。

ア いや、誰でもできない。

イ いや、誰も詠む。

ウ いや、全てのものではない。

エ いや、誰である必要もない。

オ いや、うぐいすと蛙も詠む。

問四 ③「水の温度によつても、茹で時間は変わってくるのだ」とありますが、この記憶がAの短歌にどのようなこととして描かれていますか、四十字以内で具体的に説明しなさい。

問五 ④「そういうものの良さ」とありますが、これはどういうものですか。「良さ」とは何かを明らかにして、十五字以上二十字以内で答えなさい。

問六 短歌A、B、Cが詠まれた際の共通点を四十字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

春を前にした、フランス・ラルザック地方の山村を訪れたときのことだった。ところどころに*1灌木の茂る、標高一〇〇〇メートルほどの台地がつづき、私の足元にはいやになるほどの痩せ地が広がっていた。この土では畑作は無理だろう。畜産を営むにしても、大食の牛を養える草の生産力はないだろう。私はこの条件の悪さに少し同情していた。

ア 村人は誰一人として、①この現実を嘆こうとはしなかった。そればかりか、村人はこんなふうに言う。「ここは山羊を飼うのに適した地域ですから」。荒れ地で山羊しか飼えないといった気持ちは、少しもいだいていないようである。

自分たちの暮らす地域は、他所と比較するものではない。そこは、自分たちにとっては世界の中心であり、絶対的な場所である。なぜなら、この地域に生まれた自然や歴史、文化、*2コミュニケーションとともに、自分もまた存在しているのだから。それらと自分自身とは、分離できない相互性をもっている。

今日の日本の山村の人々も②共通する感覚をもっている。以前に群馬県の山村、上野村に暮らすおばあさんに、「この村から一度も出たことのない私が言うんだから、間違いない。この村が日本で一番よい所だ」と言われて、私は感服したことがあった。自分をつくりだしている村は、比較する必要もなく一番よい所である。

人間は、関わりあう世界のなかで、自分をつくりだしている。この世界は、自分が直接関わりあう世界であり、その意味でローカルな世界である。

現在の私たちは、グローバル化していく市場経済のなかで暮らしている。その点では、ラルザックの農民も変わることはない。^①イ、実際ラルザックの農民たちは、ときどきニュースに登場するように、WTO（世界貿易機関）の農産物をめぐる会議に抗議団を派遣したりしている。^②ウ、彼らは村に帰れば、関わりあう世界をもち、この世界のなかで自分をつかみとることができ。逆に言えば、確実な自分たちの世界をもっているがゆえに、現実の動きに翻弄^{ほんろう}されることなく、「我らが世界」をこわすグローバル化の流れに抵抗^{ひびく}できるのである。

私たちが失っているのは、この「我らが世界」であり、自分をみつけたすことができる関わりあう世界である。
二十世紀の社会は、市場経済を舞台にして、すべてのものを交換可能なものと変えていった。交換可能な領域を拡大することによって、市場経済は「発展」し、そのグローバル化を推し進めていったのである。この動きのなかに、人間も巻きこまれた。気がつくとも私たちは、いつでも他の人々と交換^{こうかん}されてしまう労働の世界で働き、交換可能な地域で暮らしながら、根無し草のように、^④市場経済がつくりだした世界のなかに漂^{ひた}流^{りゅう}するようになっていた。

市場経済が拡大していく背景には、このような問題がひそんでいる。^⑤エそれは、単なる経済の効率化の問題ではない。もちろん、今日の経済のグローバル化とは、ラルザックの農民的に表現すれば、アングロサクソン（米英型）の資本主義の世界化にすぎず、この動きに飲みこまれることは、「アングロサクソンの資本主義」の価値観に統合されることを意味する。それは、それぞれの社会の歴史や文化をこわしながら、自然と人間の関係をも変えることによって、^⑥自然にも新たな負荷を背負わせていくことになるだろう。農業や林業が衰退^{すたい}すれば、その地域の自然が荒れていくようになる。

だが、より重要なのは次のようなことである。市場経済が拡大すればするほど、私たちは、自分の存在をつかみとることのできる、関わりあう世界をもたなければ、人間は消費されつづける世界に飲みこまれるばかりになってしまう。交換可能な世界のなかで、人間自身が、消費されていくように働き、暮らす社会をつくりあげてしまう。グローバル化というかたちで拡大していく市場経済は、人間自体に対して深刻な問題を投げかけているのである。^⑦オこのような時代には、「自己実現」とか「自分探し」、「個の確立」といった^⑧疎外^{そがい}された意識が次々にでてくる。誰もが、自分の確実な存在をみつけれないのである。

そう考えたとき、私は^⑨ラルザックの農民や、上野村のおばあさんの表情をつくりだした世界に戻る。彼らは、関わりあう世界のなかで、自分を見失うことなく生きていた。関わりあう世界が、自分は何者なのかを教えてくれた。
人間は関係のなかで自己をつくっている。この関係する世界を見失ったとき、人間は漂流^{ひょうりゅう}しはじめる。市場経済は、この漂流する個人を、交換可能な世界に飲みこむことによって、グローバル化をとげてきたのである。（内山節の文章による）

【語注】*1 灌木……丈が低く、幹が発達しない木。低木。*2 コミュニン……フランスの最小行政単位。
*3 疎外された意識……人間らしさを失いながら、自分が何ものでもなくなっていくという喪失感。

問一 ——— ア「オには「だから」あるいは「ところが」が入ります。「ところが」が入るものを二つ選び、記号で答えなさい。

問二 ——— ①「この現実」とありますが、これは、ラルザック地方の山村がどのようなところだということですか。二十五字以内で説明しなさい。

問三 ——— ②「共通する感覚」とありますが、「日本の山村の人々」の持つ「共通する感覚」を簡潔にわかりやすく示している十文字以内の箇所を本文よりぬき出して答えなさい。

問四 ——— ③「グローバル化の流れに抵抗できる」とありますが、このことについて、本文で示されている具体例を答えなさい。

問五 ——— ④「市場経済がつくりだした世界」とありますが、この説明としてあてはまらないものを次のア「オ」から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「アングロサクソンの資本主義」の価値観に統合された世界。

イ 人間自身が、消費されていくように働き、暮らす世界。

ウ 「自己実現」「自分探し」等の意識が次々にでてくる世界。

エ 自分が直接関わりあい、自分をみつけたすことができる世界。

オ 地域の歴史や文化をこわし、自然と人間の関係を変えた世界。

問六 ——— ⑤「自然にも新たな負荷を背負わせていく」とありますが、「自然」に「負荷を背負わせ」とはどういうことですか。簡潔に説明しなさい。

問七 ——— ⑥「ラルザックの農民や、上野村のおばあさんの表情」とありますが、これはどのような表情だと考えられますか。説明しなさい。

